

2021年3月8日

震災復興10年の人脈マップ可視化

農家民宿プロジェクト報告書

～南相馬市が築いた全国との縁／農家民宿編 50 選～

第1回訪問：2020年12月12日～13日

第2回訪問：2021年3月6日～7日（非常事態宣言で中止）

作成

国立大学法人東京海洋大学／グローバル教育研究推進機構
プロジェクト統括教員 & 海外探検隊学生有志

（令和2年度／福島県南相馬市地域課題解決調査研究事業）

調査研究計画書

事業主体名	東京海洋大学グローバル教育研究推進機構	電話	03-5463-0816
代表者職氏名	小松俊明(教授)	ファクシミリ	03-5463-0633
調査研究名	震災復興 10 年の人脈マップ可視化・農家民宿プロジェクト		

1 調査研究の目的

解決しようとしている地域課題	<p>私達は、</p> <p>2011 年の東日本大震災以来、もうすぐ 10 年が経過するが、これまでに南相馬市と縁があった人々は震災ボランティアやメディア、企業や政府機関、旅行者など多岐にわたるはずである。その方々と南相馬市との縁には、その後も継続しているものもあれば、継続していないものもあるはずである。今回のプロジェクトでは、南相馬市の農家民宿に宿泊した方々の中から、特につながりを取り戻したいと思う 100 名の方々を選び、その方々との思い出を 100 選のストーリーにまとめ、いったん連絡が断ち切れた方々との縁を再度復活させることに挑戦するという地域課題の解決を図る。</p>
地域課題を解決することで期待される効果	<p>この地域課題を解決することで、</p> <p>南相馬市と縁のある多方面の方々とのつながりを取り戻し、南相馬市との新たな交流促進につなげていくことを目指す。具体的には、農家民宿のオーナーから過去に訪問した方々の話を学生達がヒアリングし、その内容を 100 選のストーリーにまとめる。これにより、南相馬市を支持する方々とのネットワークをもう一度取り戻すきっかけを作る</p> <p>効果を目指す。</p>

2 調査研究の概要

調査研究概要	<p>上記の目的達成のために、以下の調査研究を実施する</p> <p>南相馬市の農家民宿に宿泊し、オーナーから過去に農家民宿に訪問してくれた人々について、その方々との出会いに関するストーリーをヒアリングする。個人情報管理に配慮してヒアリングを実施し、100 選ストーリーは具体的な個人名を伏せた形で作成する。100 選の中には、ボランティア、行政、企業、メディア、そのほか、いろいろな分野の方々がいるはずであり、どのような方が訪問してくれたのか、可能な範囲でその内容をフォローしたうえで、その軌跡と内容を分析する。(尚、第 2 回訪問が非常事態宣言で中止となったことから 50 選に変更した。)</p> <p>過去に南相馬市を訪問し、農家民宿に宿泊した方々で、より深く南相馬市との関係を築いてくれた方々との縁をもし再度復活させることができた場合、今後、南相馬市に対してどのような影響をもたらす可能性があるか、参加する学生メンバーで議論し、その方々の属性の分類ごとに報告書にまとめる。</p> <p>過去に南相馬市に訪問したことがある人たちにとっても、他にどのような人たちが過去に同市を訪問したのか、その内容を知ることは本人たちが再訪問したいと思うきっかけになると考え、100 選 (50 選に訂正) にまとめたストーリーは、誰もがアクセスできる形でインターネット上に情報を掲載できないかを検討する。</p>
--------	---

目次

1. 参加者／2. 期間／3. 場所／4. 目的／5. 概要	4
6. 報告 50 選（取材／農家民宿翠の里、農家民宿いちばん星）	
【深い人間関係が築いた他県との縁／全国規模のネットワーク】	5
【震災ボランティアが生んだ縁／被災地支援と復興への道のり】	5
【学生や若い世代との縁／安全性や魅力の発信】	7
【全国の企業との縁／投資や雇用の創出】	8
【メディアを通じた縁／震災復興の記録】	8
考察／学生	9
総評／教員	11
7. 農家民宿別／ヒアリングシート	12

1. 参加者

学生 6 名／関野晴樹、市原陸、湯本景子、伏島万季、富岡柚希、飯島雄大

プロジェクト統括： 小松俊明（国立大学法人東京海洋大学グローバル教育研究推進機構／教授）

学生リーダー： 関野晴樹（大学院 2 年／中国・香港派遣メンバー）
学生サブリーダー： 富岡柚希（大学 3 年／ベトナム・ハノイ、シンガポール派遣メンバー）
学生メンバー： 市原陸（大学 3 年／ベトナム・ハノイ、シンガポール派遣メンバー）
学生メンバー： 湯本景子（大学 3 年／シンガポール、ノルウェー・アルタ派遣メンバー）
学生メンバー： 伏島万季（大学 3 年／台湾・台北派遣メンバー）
学生メンバー： 椎葉俊成（大学 3 年／シンガポール、アイルランド・ダブリン派遣メンバー）
学生メンバー： 北村慧（大学 2 年／ベトナム・ハノイ、タイ・バンコク派遣メンバー）
学生メンバー： 飯嶋雄大（大学 1 年／台湾・台北派遣メンバー）

*参加学生は、東京海洋大学の海外派遣キャリア演習である海外探検隊プログラムに参加している。

2. 期間 2020 年 10 月 1 日～2021 年 3 月 31 日

南相馬市訪問 2020 年 12 月 12～13 日

（第 2 回訪問は 3 月 6－7 日に予定したが、1 都 3 県の非常事態宣言により中止）

3. 場所 農家民宿翠の里、農家民宿いちばん星（森のふるさと、塔前の家は訪問中止）

4. 目的

2011 年 3 月に起きた東日本大震災から、もうすぐ 10 年を迎える。この間に南相馬市と縁があった人々は震災ボランティアやメディア、企業や政府機関、教育機関、そして旅行者など多岐にわたる。今回のプロジェクトは、南相馬市の農家民宿に宿泊した方々と農家民宿オーナーとの出会いを 100 選（第二回訪問が中止となり、50 選に変更）としてまとめることで、全国各地と南相馬市との交流を人脈マップとして可視化させる。ここでまとめた情報が、次の 10 年にわたり南相馬市と他の地域との新たな交流促進につながることを期待したい。

5. 概要

南相馬市の農家民宿 4 か所に宿泊して農家民宿オーナーにインタビューを実施し、震災後から 10 年の間に宿泊した方々に関するヒアリングを行った。農家民宿オーナーの記憶を丁寧にたどり、出会いのきっかけと交流の内容を分析した。もし過去に一度でも南相馬市との関係を築いた方々との縁を継続・復活させることができた場合、今後南相馬市にもたらす影響は何か、そのことについて学生間で議論し、その可能性について考察した。作成した報告書は、取材させて頂いた農家民宿オーナー及び南相馬市役所に提出する予定である。本報告書が南相馬市の発展の一助となることを願う。

6. 報告

・日程（2020年12月12～13日）：50選（取材／農家民宿翠の里、農家民宿いちばん星）

【深い人間関係が築いた他県との縁／全国規模のネットワーク】

- ① 震災直後に心配の電話をくれ、足りない物資を送ってくれた幼なじみの元同僚の方がいた。
- ② 有線放送で足りない物資を集めて送ってくれた熊本県の県会議員の方がいた。
- ③ 自分達のことを心配して何度も足を運んでくれた熊本県の方がいた。
- ④ ボランティアに来てくれた熊本県にあるホテルのオーナーの方がいた。
- ⑤ 震災直後から数ヶ月に1回の頻度でボランティアにきてくれた新潟県の県職員の方がいた。
- ⑥ 震災後のクリスマスから仮設住宅でギターを弾いたり、歌を歌ったりしてくれ、プレゼントも持ってきてくれた横浜の職員の方がいた。
- ⑦ 避難所があったときに、年に2回炊き出しにきてくれた大阪の焼き鳥店の方がいた。

震災を通して「人との繋がり」を強く感じた。普段から頻繁に連絡を取り合っていなかった人でも、いざというときに自分を思い出して心配してくれることで心の支えになったという。また、調査を通してボランティアには過去に震災などの大きな自然災害を経験した地域の方が多い印象を受けた。実際に他の地域で災害が起きたときには、南相馬市で助けてもらった人たちが現地に電話をかけたり、駆けつけたりといった逆の繋がりも生まれていた。震災がきっかけとなり、2つの地域に助け合いの繋がりが生まれたことは好ましいことであり、今後も日本全体で災害を通じた新たな繋がりが生み出される可能性がある。このようにして生まれた地域同士の繋がりは「市の活性化」をもたらす可能性を秘めており、実際にボランティア活動で生まれた縁から姉妹都市になった事例も存在する。

【震災ボランティアが生んだ縁／被災地支援と復興への道のり】

- ⑧ 震災後真っ先に南相馬市に訪れたボランティアの方がいた。当時は熊本で看護師をしており、個人でバスを乗り継いできた。現在は病院の所長になったため忙しく、南相馬市に来られないでいる。
- ⑨ 震災後真っ先に南相馬市に訪れたボランティアの方で、宮崎から来て広く活動してくれた。
- ⑩ 震災直後から来てくれている東京の介護団体は、福祉のボランティアを広い地域で行ってくれたため、民宿にくるのはいつも夜遅くだった。
- ⑪ 震災前からの友人である南相馬市在住の大工は、震災時に父親を亡くされたが、民宿施設の建設において大きな貢献をしてくれた。
- ⑫ 東京の電気屋は、民宿施設の配電工事を担当してくれた。その上で宿泊代も払ってくれた。民宿に来る際には毎回「ただいま」と言う。
- ⑬ 広島のご年配の絵描きは、民宿の看板を描いてくれた。今でもその看板を利用している。
- ⑭ 震災直後の瓦礫撤去のボランティアのときから、定期的に来ていた愛知県の高校の校長先生がいる。農家民宿オーナーと打ち解け、常連になってくれた。
- ⑮ 震災直後にボランティアに来てくれ、その後も野菜を送ってくれる人がいる。
- ⑯ カレーの配給をしていると聞き、県の社会福祉協議会が材料とお米を寄付してくれた。泊めることはできないけれど、協力したいという近所の人からの寄付も集まった。

- ⑰ ボランティア感謝会を開き、ボランティアの方々と夕食をとった消防の関係者の方々がいた。
- ⑱ 全盲の方が所属するマッサージ団体は、仮設住宅の入居者へのマッサージをするために宿泊した。
2018年までは2ヶ月に1回訪れ、活動を行っていた。現在は引率者が高齢になり、
頻繁に訪れることが困難になったことから、年に2〜3回に回数を減らして訪問している。
- ⑲ 京都の元僧侶の方々は年に2回宿泊をしており、被災者に編み物を教えていた。
そこで製造した商品を買取り、販売して得た利益を被災者に還元していた。
- ⑳ コンサートをしてくれた神戸の盲目のピアニストがいた。
- ㉑ コンサートをしてくれた耳の聞こえない歌手がいた。
- ㉒ 体操や大正琴、ピアノを披露してくれた川越の年配の団体があった。
- ㉓ 毎年宿泊している日本画家は、仮設住宅を訪れる活動をしていた。自作のカレンダーを仮設住宅の
入居者に配布し、南相馬市内で展覧会を行ったほか、被災者300人の似顔絵を1人ずつ作成した。
- ㉔ 南相馬市出身の団員がいるため、毎年民宿を利用する合唱団がある。定期的に公演会を開いている。
- ㉕ 関東の大学の藍染めサークルが、農家民宿の方に藍染めを伝授しに来た。
- ㉖ 徳島県の本藍の先生が、藍染めについて教えるために農家民宿の方と川俣シルク工場の見学をした。
- ㉗ 徳島県の藍の研究者が、藍の種について教えるため講義を行った。
- ㉘ 日鷲神社の方が、農家民宿の方と一緒に藍の技術を学んだ。
- ㉙ 山形県の高校教諭が、ふるさと納税返礼品のデザイン等に関わった。
- ㉚ 役所の方が、ふるさと納税返礼品の実現という形で支援してくれた。
- ㉛ カナダの方が、常磐線を開通させるために切られた桜の木の枝で染めたスカーフを購入してくれた。
- ㉜ カナダの舞踏家が、舞踏を披露してくれた。

震災後の南相馬市には、個人から団体まで多くのボランティアが訪れていた。内容としては、主に土砂や瓦礫除去、炊き出し、そして芸術や娯楽の提供があった。通常のボランティア以外にも、飲食店を営む方や絵描き、電気屋など、それぞれの職業や特徴を活かして被災地の復興に協力してくれていた。瓦礫除去など一時的なボランティアの場合、作業には終わる時があり、しだいに訪問者は少なくなっていくように思える。しかし、ボランティアに来たことで新たに土地の魅力に気づき、常連として繰り返し訪問してくれる方もおり、様々な活動を通して縁が深まっている。ボランティア終了後も通い続けてくれた人たちとの繋がりによって藍染めの文化が生まれ、ふるさと納税の返礼品に採用されたのは良い例である。農家民宿では他の宿泊施設とは異なり、地元に住む人と宿泊者との距離が近いと、人の優しさや地元の産物、エピソードに触れやすく、南相馬市の魅力を伝えることにおいても重要な役割を果たしている。娯楽や芸術などの提供の場合は、それを披露できる場所さえあれば継続して行うことができるため、現在でも活動を続けてくれるボランティアもいる。課題は、そのための場所の確保である。震災後は仮設住宅が隣接していたため、人が集まる場所があったが、既に仮設住宅は撤去されてしまっている。コロナの影響でイベント開催の自粛が必要な時期ではあるが、再度人々が気軽に集まれる場所を確保してイベント等を行えば、これまで来てくれた人やさらに新しい人も誘致できるのではないだろうか。



図1. 翠の里の襖絵 日本画家の作品

【学生や若い世代との縁／安全性や魅力の発信】

- ③ ボランティアとして南相馬市を訪れた芸術を学ぶ大学生がいた。
40日間の滞在中、仮設住宅で聞いた話を絵にし、市内で展覧会を開いた。
- ④ 仮設住宅の支援に訪れた関東の大学生が約20人いた。
- ⑤ 瓦礫の撤去と家の解体に訪れた関東の大学生がいた。近年は草刈りに協力してくれている。
- ⑥ 避難所でマッサージを行った近畿の医療系大学生がいた。
- ⑦ 避難所などで劇を披露した四国の中学生約10人がいた。
- ⑧ 浪江町にボランティアに来てくれた大学生がいた。
- ⑨ コロナ禍にも関わらず、農家民宿を訪れてくれた大学生がいた。
- ⑩ 親子三代で毎年、農家民宿に泊まりに来る方がいた。

震災直後から大学生に加え、中高生もボランティアとして南相馬市を訪れていた。オーナーの方々も、若い世代が南相馬市に関心を寄せ、被災地に対して熱い想いを持ってくれたことは強く印象に残っており、喜びを感じていた。本学も4年前から南相馬復興大学の構想に賛同して地域課題解決研究事業に参画した。現在は大学毎にプロジェクトを行っているが、今後は大学間の交流を深める機会もあればいいのではないだろうか。南相馬市で繋がった縁によって、相乗的な貢献ができる可能性があると感じた。

福島県観光客入込状況（図

2)によると、南相馬市が所属する浜通り地区のみが現在でも震災前の平成22年から観光客数が戻っていない。これは放射性物質が残っているかもしれないという潜在的な不安が観光客にあることが



図2. 福島県観光客入込状況（福島県商工労働部資料／令和元年）

1つの可能性として考えられる。これに対して、私たち学生ができることとして、若い世代ならではの正確な情報発信が挙げられる。しかし、SNSだけでは広く情報発信ができて、その影響力は小さい。そのため、学内のあらゆる機会を活用して、南相馬で何をしてきたか、何を魅力に感じたかを丁寧に伝えていくことが、南相馬市の認知度を上げ、潜在的な不安を取り払う上で効果的であると考え。

南相馬市には相馬野馬追という大きな祭事がある。年一回の市を挙げての祭事には、全国から多くの人が集まり、農家民宿を含めて宿泊施設の予約が埋まるという。しかし、私たちはこのプロジェクトへの参加が決定するまで、その存在を知らなかった。“相馬野馬追”の魅力を若い世代に情報発信をしていくことは、南相馬市と全国がもっと繋がりを深めていくきっかけとなるに違いない。実際、映画やコミック、歴史小説やゲームなどを通して戦国武将のファンは若い層にも広がっており、競馬や乗馬も若い世代に訴えるものがある。南相馬市を含む全国の多くの市町村で、少子高齢化による人口削減が問題であるが、国内外ではB級グルメ、ゆるキャラ、コスプレなどで地方創生に成功した事例は数多くあり、南相馬市においても若い世代の注目を集めるための新しい取り組みに関する具体的なアイデアが必要だと感じた。

【全国の企業との縁／投資や雇用の創出】

- ④① 研修で宿泊した印刷会社社員 ④② 鉄道会社 ④③ 電気メーカー ④④ 財閥系の会社
-

企業研修で使用される宿泊施設はビジネスホテルが主流である中で、日本を代表する大企業が農家民宿を企業研修の宿泊施設として利用していることは素晴らしいことだと感じた。最初はある企業の社員が一人で宿泊し、その口コミが社内に広がり、最終的に関係会社にも話が派生したとのことだった。ビジネスホテルの気楽さもいいが、民宿に宿泊することでビジネスホテルでは感じられないおもてなしを受けることができる。農家民宿オーナーとの話の中でも、民宿はあらゆる点で非効率であるが、そこでしか体感できないものが存在するのが魅力であると伺った。企業の事業活動では何事も効率性を意識しがちであるが、あえてこのようなサービスに触れることで新たな学びを得る機会となるかもしれない。また、企業から継続的に社員が南相馬市に訪問する流れができれば、その企業はいずれ南相馬市に支店や工場を配置することを検討するかもしれない。それによって南相馬市に新たな雇用が生まれ、地元の若い働き手の流出を防ぐことができる可能性もある。そのためにも南相馬市には過ごしやすい気候があり、かつては優秀な二次産業が発達していたこと、さらに農業、漁業などの一次産業を行いやすい自然環境があることなど、南相馬の魅力を広く理解してもらうことが重要であり、その点でも農家民宿は重要な役割を担っていると考ええる。

【メディアを通じた縁／震災復興の記録】

- ④⑤ 震災のドキュメンタリー映画を撮影しに来た中国人の方がいた。
④⑥ 浪江小学校に残っている震災と津波の跡の写真を撮りに来た中国人の方がいた。
④⑦ 被災地の本を執筆し、読み聞かせを仮設住宅で行った大学教授と学生の団体の方々が出た。
④⑧ 番組の取材で訪問された演歌歌手の方がいた。
④⑨ 写真家、文筆家、新聞記者で、現在も関係が続いているの方々が出た。
④⑩ 南相馬ロボットテストフィールド視察で民宿を訪れた政治家のグループが出た。
-

震災直後から様々なメディアが国内外から南相馬市へ訪れていた。まもなく震災から10年が経ち、被災地の早期復興は誰もが望むことであるが、その反面で当時の記憶は薄れつつある。訪問した中国の写真家や映画監督、本を執筆した大学教授の活動は、人々の記憶が薄れていく中で、国内外の多くの人々に震災以降の足跡を知る“きっかけ”を与えてくれている。あるアーティストは震災の被害を作品として残した後、その作品を南相馬市内の展覧会で発表した。南相馬市の被災に関連した芸術作品を残したことで、それを見るために南相馬市を訪れる訪問者が増加し、地域活性化に繋がる可能性も考えられる。

加えてインターネットなどのメディアを活用することも重要であり、被災当時の状態や現在の情報について、今後も定期的に発信する特別な媒体があっても良いのではないかと考える。情報発信によって被災地に興味を持つ人が実際に訪れ、それをさらに新たなメディアが取り上げるという循環ができることが望ましい。中でも、日報でスクープやニュース性を重視するメディアである新聞よりも、追加情報を繰り返しいつでも発信しやすいインターネットメディアの方が、南相馬市の情報発信にはなじむのではないだろうか。メディアは情報拡散の影響力が強く、南相馬市の実情を伝える良い手段であることから、再訪問のきっかけをつくるのであれば、南相馬市にとっても今後も良い影響を及ぼすであろう。

【考察／学生】

南相馬市の博物館で一枚の写真をみた。日常の風景の中にもまるで CG で貼り付けたように不自然に高い波が映っていた。実際に津波を目にしたオーナーは、最初波ではなく煙が押し寄せてきたと思ったそうだ。南相馬市を訪れ、当時のことを知っていく中で、私たちがあの日見聞きしていたことはほんの一部でしかなく、それすらも私たちの中で少しずつ風化してしまっていることに気づいた。しかし、被災地に住んでいる人たちの震災に関する記憶は風化しない。つらいこと、やるせないことを抱えながらも、県外から来た私たちを温かく迎え、話してくださった。私は今回見聞きしたことを忘れないだろう。

ボランティアで大切なことは、次に被害を受けるのは自分たちかもしれない、その意識をもちながら自分のできることを考えることだと教えて頂いた。今自分はそれができているだろうか。心のどこかで、可哀想な地域の発展のために、自分とは離れたこととして扱っていることに気づいた。まさにそういうことだと思った。いったい被災を自分のこととして行動できている人間がどれくらいいるのだろうか、これを書いている今の自分はどうか、今後も考え続けていく必要があると思った。(関野晴樹)

農家民宿のオーナーが「日本に住む誰しもが同じような被害にあう可能性を持っている」と言っていたことが最も印象に残っている。いつ大切な人やモノを失うことになるかはわからない。2011年は偶然東北が震災の被害を受けたが、次は私たちが同じ立場になる可能性もある。今私たちができることは、そのときに備えて全力で生きることだというオーナーの強い思いが伝わってきた。南相馬市については、実際に現地に行き、帰ってきた後にも調べることで理解を深めることができたと思う。事前の調査だけでは限界があることに加え、このようなプロジェクトに参加していなければ、南相馬市を訪れることはなかったと感じる。南相馬市は近くに仙台市という大きな都市があるため、そちらに観光客が流れてしまう課題があると感じた。というのも、現地に到着した際に「相馬野馬追の時期には仙台市に宿泊して、そのまま日帰りで見にくる観光客もいる」という話を聞いたためである。ただこれは南相馬市だけで発生している問題ではなく、観光地の少ない地方の市町村でも同様に起きていることに違いない。「南相馬市には相馬野馬追くらいしかない」というコメントもあったが、南相馬市が太平洋側に位置して、夏冬問わず比較的過ごしやすい地域であることは魅力を感じた。南相馬市ならではの強みを掘り起こして、それを発信していくことに私も協力していきたいと思う。(市原陸)

プロジェクトを通じて、農家民宿ならではの人の繋がりや温かさを実際に体感することができた。とりわけ、私は南相馬に住む人の「懐の深さ」に驚いた。私が宿泊した翠の里という農家民宿は、緊急事態宣言が解除された直後は、宿泊客の受け入れに戸惑ったという。しかし、ある学生団体が宿泊したいという意思を電話で伝えたため、このような状況においても学生の宿泊客を受け入れようと決意したそうだ。この話から、「想定外のことが起きたとしても、それを恐れてばかりいるのではなく、やるべきことをやるべき」だという考えを汲み取ることができた。これは、就職活動を始めた現在の私に、最も適した言葉であると思う。私は、就職活動を控えて、新型コロナウイルスが将来をどのように変化させるのか、先が見えない不安に襲われることがある。しかし、農家民宿のオーナーさんの考えに従えば、恐れては何も始まらない事が納得できる。今やるべきことは、何が「恐れ」であるのか明確に言語化し、その「恐れ」を取り除くために、私の就活で言えば、業界研究や自己分析などに取り組み、研鑽を積むことだろうか。

今回のプロジェクトは、農家民宿とそこに宿泊した人との繋がりを視覚化することを目的としていたが、それ以外にも人生において重要な考え方や姿勢、震災からの教訓などを得ることができたと思う。困難に遭遇したときは、この考え方を念頭に置いて、今後の学生生活を送りたいと思う。(湯本景子)

民宿はただ単に宿を提供するためだけのものではなく、人と人を繋げたり新しい文化を形成したりする空間であることを肌で感じた。普通に生活していたら一生出会うことのない人同士が民宿という特殊な空間で繋がり、深い関係になるのはとても素敵なことだと思う。「辛いことがあったらいつでもおいで」という言葉が忘れられない。民宿のような場所が特殊な空間ではなく、ありきたりで身近な空間であつたらいいなと思った。お伺いしたお話の中でも特にボランティアの学生がきっかけで根づいた藍染め文化のストーリーが印象的であり、また1つの物事に対する民宿のお母さんの姿勢や行動力・好奇心には感銘を受けた。私自身、何歳になっても新しい物に興味を持ち、挑戦し続ける人間でありたいと思っており、お母さんは私の具体的な目標となった。私の理想の将来を具現化した人に出会えたことも今回のプロジェクトに参加したことの意義であつたと考える。(伏島万季)

私は、この南相馬プロジェクトを通して、何があろうとも自分自身を信じて努力をし続けることの大切さを身に染みて感じた。なぜなら、農家民宿の方々の行動力と人柄から生まれる様々な出会いについてのお話を聞き、心打たれたからだ。農家民宿の方は、化学薬品を使わず手間をかけて現地でしかできない本藍を行う際、周りの人がどう思うかを気にしつつも目立たなくても誰かがやっているという事実が重要だと考え、続けていくためにも結果を残そうと取り組んでいた。このようなことは、そう簡単にできることではない。私自身、高校時代、農業について学んでいたことから農業実習で学んだことを活かそうと、高校三年間、知的障害者施設で農業を通したボランティア活動を行った。このような小さな活動により貢献できたか否か不安であつたが、今回の活動を通して、やりきることに意味を感じた。また、農家民宿の方は、泊まる人々のつながりからまた更に輪が広がってほしいと述べていたので、私も何らかの形で現場の人々と関わりながら地域に貢献していきたい。今回の経験を活かし、これからの様々な自らの活動にも繋げていきたい。(富岡柚希)

震災当時、私はシンガポールでテレビ中継を見ていた。その頃はスマホもパソコンも持っていなかったためいつも通り学校から帰ってテレビをつけたときに津波が映し出された時、あまりの被害に衝撃を受けた事を鮮明に記憶している。日本の民宿に泊まること、そして被災者の方々の話を聞くのも初めてだったので、とても貴重な経験ができた。津波に対する認識が十分でなかった話や、烏海岸での自衛隊の話、津波が黒い煙の様だったという話は特に自分の中で印象に残った。また、民宿の経営者の印象に残った人々の話を聞く中で自然災害が他の国に比べて多い日本に住む人々の精神を垣間見ることができたと感じる。海外であれば、同情や宗教観が主なボランティアの動機であるのに対し、日本では共感の念の方が動機として強くある様に思えた。自分も被災者になる可能性が高い日本だからこそ相手を「可哀想だ」と思うのではなく、自分と相手を対等に扱いボランティア活動に臨めるのだと考えた。(飯嶋雄大)

【総評／教員】

東日本大震災から10年が経つ。この間も様々な天災が日本を襲った。特に昨年来のコロナ禍は、例外なく全ての人の生活に影響をもたらし、私たちは誰もが被災する可能性があると思えることになった。そして被災から復興する過程では、当事者を支援するネットワークが大切であることもわかってきた。特に、人と人が繋がりを取り戻すこと、さらに新たなつながりを作ることが鍵となる。3年目の南相馬市への訪問の機会を得た私たちは、震災10年目の節目を迎えるにあたり、南相馬市を舞台にして広がった様々な交流を可視化させたいと考え、農家民宿に宿泊した人たちの等身大の姿を探るプロジェクトを立ち上げたのである。

このプロジェクトに挑戦することに共感した10代と20代の若い大学生は、60代を迎えている農家民宿オーナーの方々と貴重な時間を共に過ごし、インタビューを実施した結果、2軒の農家民宿において合計50件を超える過去の交流のストーリーを知ることができた。すべてが生々しい実話であり、そこには心の痛みと癒し、不条理な現実と希望の光など、心の機微に触れる話がたくさん存在した。

私達は、これからも様々な天災と向き合うことになるのだろう。運悪く被災者になる場合もあるかもしれないが、どんな時でも様々な形で支援者になれる。今回のプロジェクトを通して、その思いをあらためて強くした。(小松俊明)

7. 農家民宿別／ヒアリングシート

1) 農家民宿翠の里

【震災の記憶を後世へと残す可能性】

- ① 写真家や文筆家といったアーティスト、現在も関係が続いている宿泊者。
- ② 新聞記者、震災の直後に多く見られたが、現在関わりはない。
- ③ 震災直後にボランティアに来た大学生(2011年)
- ④ コロナ禍にも関わらず農家民宿を訪れた大学生(2020年)、現在も関係が続いている宿泊者。

①～④の訪問者に共通していることは、「震災の記憶を後世に残したい、記録したい」という理由で、南相馬市を訪れている。特に、写真家や文筆家などアーティストと呼ばれる職業の方は、震災の被害を「作品」の形で残しておくことに価値を見出している。また、あるアーティストは震災の被害を作品として残した後、その作品を南相馬市内の展覧会で発表していた。これより、アーティストが南相馬市の被災に関連した作品を展示することで、南相馬市を訪れる訪問者が増加し、地域活性に繋がる可能性も示唆される。しかし、彼らの訪問の本来の目的は、展覧会ではなく、あくまでも後世に記憶を残すという点に絞られているようだ。

②はメディア関係者の訪問を示している。震災発生直後、宿泊場所がなかった記者のために、翠の里は寢床を開放したという。あくまでも宿泊場所として提供したに過ぎず、そこから深い関係には至らなかったという。メディアは情報拡散の影響力が強く、南相馬市の実情を伝える良い手段であることから、新聞社との関係が途絶えるのは痛手となったのではないかと。よって、関係を復活させるためには、各新聞社から南相馬市に取材依頼が来た場合、再度農家民宿での宿泊を促す必要があるだろう。

③は、震災直後に農家民宿を訪れた大学生である。彼らは、福島第一原発の水素爆発の発生前後(正確な日程は不明)にも関わらず、農家民宿を訪れた。浪江町が封鎖される前日に宿泊し、翌日浪江町に入ったという。大学生らは、両親の反対を押し切って福島を訪れており、小倉さんが浪江町の危険性を訴えても浪江町に向かったそうだ。

④も③と類似したエピソードである。④では2020年9月に大学生複数名が農家民宿に宿泊した。新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、彼らは翠の里に直接電話をし、宿泊を希望する旨を伝えたそうだ。小倉さんは、③④の訪問者をはっきりと覚えているという。これは、大学生という若い世代が、南相馬に関心を寄せ、被災地に対する熱い想いを持っていたからである。震災発生直後やコロナ禍など、危機的状況においても南相馬を訪れる人には、「南相馬の役に立ちたい」「南相馬を知りたい」という熱い想いを感じ取ることができる。そのため、大学生が農家民宿との関係を繋げていくためには、彼らが大学という教育機関に戻ったあとに、学内で周知する活動を行う必要があるだろう。また、以後彼らの後輩が引き継ぐことにより、ボランティアや簡易的な語り部として、大学生が農家民宿の興隆に寄与すると考えられる。

【農家民宿と被災者を繋ぐ可能性】

- ⑤ 芸術を学ぶ大学、40日間と長期滞在をした。
- ⑥ 毎年宿泊しており、翠の里との交流は深い日本画家。
- ⑦ 全盲の方が所属するマッサージボランティア団体が宿泊した。
- ⑧ 京都の元僧侶団体は年に2回ほど宿泊をしている

本項目「農家民宿と被災者を繋ぐ可能性」は、「震災の記憶を後世へと残す可能性」の訪問者と類似しており、大学生やボランティアが多い。

⑤は傾聴ボランティア/炊事ボランティアとして、南相馬市を訪れた大学生である。この大学生は、芸術を学んでいたこともあり、南相馬市の仮設住宅で聞いた話を絵にし、市内で展覧会を開いた。現在はイラストレーターを行っているという。

⑥は毎年宿泊しており、仮設住宅を訪れる活動を継続している。自作のカレンダーを仮設住宅の入居者に配布し、被災者との交流に重きを置いている。また、南相馬市内の銘醸館で展覧会を行ったほか、被災者300人に向けて一人一人の似顔絵を作成した。

⑦は全盲の方が所属する団体であり、仮設住宅の入居者にマッサージをするために南相馬を訪れた。2018年までは、2ヶ月に1回訪れ、活動を行っていたという。現在は、引率者が高齢になり、頻繁に南相馬を訪れることが困難になったことから、回数を減らして年に2~3回訪問するそうだ。

⑧は元僧侶団体であり、仮設住宅の入居者支援を目的に南相馬市を訪問した。年に2回訪問しており、被災者に編み物を教えていた。彼らは仮設住宅の入居者に編み物をしてもらい、製造した商品を50円で買い取り、200円で販売していた。この利益を被災者に還元することで、南相馬を支援しようと努めた。共通していることは、被災者との対話を重視している点である。また、⑧以外に共通することは、訪問回数がかかり多く、長年関係が続いている点である。これは、彼らが一時的な支援ではなく、南相馬市の被災者を癒すような支援を行っていると言える。これより、約10年という長い関係を続けるためには、その土地に住む人々との深い交流、対話が不可欠であることが分かる。一方、がれきの撤去に代表される一時的な支援は、関係が途絶えてしまうことが多いと考えられる。

【ふるさとの繋がりから他地域との繋がり生まれる可能性】

- ⑨ 震災直後に心配の電話をくれ、足りない物資を送ってくれた幼なじみ兼もと同僚
- ⑩ 有線放送で足りない物資を集めて送ってくれた熊本の市議会議員
- ⑪ 小倉さんを心配して何度も足を運んでくれた人吉市の人
- ⑫ ボランティアに来てくれた阿蘇高原ホテルのオーナー

今回の震災で小倉さんが一番感じたのは「ふるさとの繋がり」だそうだ。普段から頻繁に連絡を取り合っていたわけではない人がいざというときに自分を思い出してくれるのはそれだけで心の支えになるという。熊本で豪雨災害が起きた際には小倉さんが電話を掛けたり、相馬でボランティアに助けてもらった人たちが熊本に駆けつけたりといった震災とは逆の繋がりも生まれた。熊本と相馬をふるさとにもつ小倉さんという人を介して、二つの地域に助け合いの繋がり生まれたことは素敵なことであり、小倉さんだけで無く誰もがその繋がりを生み出す可能性をもつだろう。

【一時的な支援者】

- ⑬ 震災直後ボランティアに来てくれ、その後野菜を送ってくれた人
- ⑭ カレーの配給をしていると聞き、材料とお米を寄付してくれた県の社会福祉協議会
- ⑮ ボランティア感謝会を開きボランティアの方々と夕食をとった消防の人

ボランティアがきっかけで南相馬に興味を持ち、その後も繋がりを持ち続ける人と、一時的な関わりで終わる人がいる。どちらが良いという訳ではないが、今後の南相馬を考える上では多くの人に南相馬に興味を持ってもらえるかは重要である。南相馬に魅力を感じその後も通い続けた人たちの繋がりによって藍染め文化が生まれふるさと納税の返礼品にまで発展したのは良い例だ。南相馬を今後発展させていく上で、外への発信は不可欠であり、一時的な支援者をどれだけ根付かせられるかが勝負である。鍵となるのは民宿だ。民宿は地元の人と宿泊者の距離が近く、人の優しさや地元の産物、エピソードに触れやすい。まずは南相馬の若い人たちが地元の民宿が持つ力と魅力を知ること大切であり、民宿の文化を後世へと引き継ぎ、発展させていくことが求められるが、南相馬市の若者減少の問題もある。一時的な支援のつもりでできた人やたまたま立ち寄った人を南相馬に引き込み、民宿の運営に携わりたいと思ってもらえれば、民宿の発展、南相馬の発展につながるだろう。

【農家民宿に宿泊することのよる支援】

- ⑯ 農家民宿を選んで宿泊場所にした人

2011年以降、白樺合唱団の方々が合唱する際の宿泊を目的として滞在していた。白樺合唱団は南相馬出身の団員がいたことがきっかけでほぼ毎年来るようになった。農家民宿にお金を落とすため、分宿してくれた。度々公演会を開いてくれる。宿泊時に小倉さんプロデュースのマスクを購入してくれた。農家民宿に宿泊することにより、支援するという形が民宿継続や人との繋がりとしての可能性を生むだろう。

【新しい文化を生む可能性】

- ⑰農家民宿の方に藍染めを伝授しに来た関東の大学藍染めサークル
- ⑱藍染めについて教えるために農家民宿の方と川俣シルク工場の見学をした
- ⑲藍の種について教えるため講義を行った人
- ⑳農家民宿の方と一緒に藍の技術を学んだ日鷲神社の方
- ㉑ふるさと納税返礼品のデザイン等に関わった高校教諭
- ㉒ふるさと納税返礼品の実現という形で支援してくれた役所の方
- ㉓常磐線を開通させるために切られた桜の木の枝で染めたスカーフを購入した方

関東の大学藍染めサークルの方々が、農家民宿の方を含めた農家民宿全体に藍染めの技術を教えてくれ、藍染めサークルは近所の農家民宿の方の畑を借りて、藍の種を埋めていった。ここから、農家民宿による藍染めの文化が根付いた。その後、農家民宿の方は、化学薬品を使わず手間をかけて現地でしか行うことができない本藍を続けていきたいと考え、二つの藍染めの方法を存在させるには、何か形に残すことが重要だと役所の方が教えてくれた。一つの団体によって文化が根付き、その文化が多くの人々の協力によって様々な形で地域に貢献していくという新しい文化が生まれる可能性を感じた。

【未分類】

- ㉔山津見神社の天井を撮影していた和歌山大学の観光教授
- ㉕舞踏の披露をしたカナダの舞踊家

宿泊した際に、山津見神社の天井の写真を撮影していた。その後、山津見神社が焼失する事件が発生し、彼らが山津見神社の狼の絵を写真に撮っていたため、その写真を元に東京藝術大学の学生が復元することができた。たまたま宿泊をし、撮影していたゆえにかなり重要な役割を果たした。

以前、滞在した和歌山大学の加藤・サイモン氏の伝手で、カナダの舞踊家が呼ばれ、新しい狼の絵を奉納する際に、カナダの舞踊家が踊った。この時、衣装として藍染めの衣装を着ていて衣装は舞踊家が自ら染めたため、手が藍色に染まった。狼を模した舞踏を行ったため、普段は手を黒くする必要があるが、舞踊家自ら藍染めを行い手が藍色になったため、そのまま踊ってもらった。

2) 農家民宿いちばん星

【ボランティア活動から生まれた縁と地域活性化】

- ① 震災後真っ先に南相馬に来たボランティアの1人。当時は熊本で看護師をしており、個人でバスを乗り継いで来た。今は病院の所長になっているという。
- ② 震災後真っ先に南相馬に来たボランティアの1人。宮崎から来てくれて、広く活動して頂いた。
※ ①、②はまだ民宿ができる前に、協力してくださった方々。
- ③ 震災直後から来てくれている東京の介護団体は、福祉系のボランティアを広い地域で行ってくれていたため、民宿にくるのはいつも夜遅くだった。
- ④ 新潟県の職員の方は、震災直後から数ヶ月に1回の頻度で被災地のボランティアをしてくれた。
- ⑤ 大阪の焼き鳥屋。避難所があったときには、年に2回炊き出しにきてくれた。

- ⑥ 横浜の職員の方は、震災後のクリスマスから仮設住宅でギターを弾き、歌を歌ってくれて、プレゼントも持ってきてくれた。
- ⑦ 震災前からの友人である南相馬の大工は、震災時に父親を亡くされたが民宿施設の建設において大きな貢献をしてくれた。
- ⑧ 東京から来てくれる電気屋。民宿施設の配電工事を担当してくれ、たくさん手伝ったうえで宿泊代も払ってくれた。民宿に来る際には毎回「ただいま」と言う。
- ⑨ 広島のご年配の絵描き。民宿の看板などを描いてくれた。
- ⑩ 震災直後の瓦礫を撤去するボランティアのときから、定期的に来ていた愛知県の校長。オーナーと打ち解け、常連になった。
- ⑪ 仮設住宅がある頃、コンサートをしてくれた神戸の盲目のピアニスト。
- ⑫ 仮設住宅がある頃、コンサートをしてくれた耳の聞こえない歌手。
- ⑬ 仮設住宅がある頃、体操や大正琴、ピアノを披露してくれた川越の老人の団体。

震災後の南相馬市には、個人から団体まで多くのボランティアが訪れていた。通常のボランティア以外にも、飲食店を営む方や絵描き、電気屋など、それぞれの特徴を生かして被災地の復興に協力している印象を受けた。中でも、過去に震災などの大きな自然災害を経験した地域の方の訪問が多いそうだ。このように生まれた地域の同士のつながりは、「市の活性化」にもつながる可能性を秘めており、実際にボランティアを通して姉妹都市になる計画が考案されている。

ボランティア活動は、主に土砂や瓦礫除去などの肉体労働、そして娯楽の提供や炊き出しといった支援に分類できる。前者の場合、終わりの目安があり、対象がなくなれば来なくなってしまうように思える。しかし、ボランティアに来ることで土地の魅力に惹かれ、常連になる方も多く、活動を通して強固な縁が生まれていた。それに対して、後者は披露をできる場所さえあればいつでも行うことができるため、現在でもその様に活動しているボランティアもいる。ただ、そこで問題になるのが「場所の確保」である。震災後は仮設住宅が隣接していたため、人が集まれる大きいスペース場所があったが、今年三月に仮設住宅は撤去されてしまった。新型コロナウイルスの影響によるイベントの自粛などが呼びかけている最中ではあるが、再度人々が気軽に集まれる様なホールや広場でイベントなどを行うことで、これまで来ていた人も、新しい人も誘致出来るのではないだろうか。

【著名人・メディアによる認知の広がり、震災の記憶の流布】

- ⑭ 2018年、震災のドキュメンタリー映画を撮影しに来た中国人。
- ⑮ 2019年、浪江小学校に残っている震災と津波の瓦礫の写真を撮りに来た中国人。
- ⑯ 被災地の本を執筆し、読み聞かせを仮設住宅で行った大学教授と学生の団体。
- ⑰ 番組の取材で訪問された演歌歌手。
- ⑱ 南相馬ロボットテストフィールドに訪問した際に民宿に訪れた政治家のグループ。

震災直後から様々なメディアが国内外から南相馬へ訪れていた。震災からまもなく10年が経とうとしており、被災地の早期復興は誰もが望むことであるが、その反面で当時の記憶が薄れてしまうという恐れがある。訪問してくれた中国の写真家や映画監督、本を執筆した教授の活動は記憶が薄れることを防ぎ、

国内外のより多くの人々に震災を知ってもらうための“きっかけ”になりうる。そして、この様なメディアが人々の目につきやすい場所にあることも重要である。ネット社会の中では、被災地の当時の状態や現在の情報を定期的に発信する媒体があっても良いのではないかと考える。情報を発信によって、被災地に興味を持つ人が実際に訪れ、新たなメディアを被災地に呼ぶことができ、メディアが発信する情報で人やメディアを呼ぶといった連鎖が期待できる。著名人の訪問についてもお話をいただいた。彼らの持つ影響力は南相馬の認知にも繋がり、訪問は地元の人々のモチベーションアップにもなる可能性がある。

【学生ボランティアによる南相馬市の安全性や魅力の発信】

- ① 震災直後に仮設住宅の支援に訪れた関東の大学生約 20 人
- ② 震災直後に瓦礫の撤去と家の解体に訪れた関東の大学生、近年は草刈りに協力している。
- ③ 震災直後に避難所でマッサージを行った近畿の医療系大学生。
- ④ 震災直後に避難所などで劇を披露した四国の中学生約 10 人
- ⑤ 親子三代で毎年、農家民宿に泊まりに来る方

※ ①から④については現在でも交流がある。⑤については現在交流が途絶えている。

震災直後から大学生に加え、未成年の学生もボランティアとして南相馬市を訪れていたことがわかった。本大学も 4 年前から南相馬市復興大学に参加し、他の大学の取り組みを見て現地で話をする機会があった。現在は大学毎にプロジェクトを行っているが、今後も交流を深めていくことで、南相馬市でつながった縁によって、更に相乗的に大きな貢献できる可能性があると感じた。

福島県観光客入込状況(右下図)によると、南相馬市が所属する浜通り地区のみが現在でも震災前の平成 22 年から観光客数が戻っていない。これは「放射性物質が残っているかもしれないという潜在的な不安が観光客にあること」が 1 つの可能性として挙げられる。

これに対して、私たち学生ができることとして、若い世代ならではの情報発信が考えられる。しかし、身近に利用している SNS では広く情報発信ができて、その影響力は小さい。そのため、学内の友達や周りの人たちに対して口頭で、南相馬で何をしてきたか、何が魅力に感じたかを伝えることが、南相馬市の認知、そして潜在的な不安を取り払う上で、効果的であると考え。規模は小さく、話を聞いた人が必ず訪れるとは限らない。しかし、ボランティアに参加した学生に加え、このプロジェクトにも全国の様々な大学が参加しており、それを機に現在でも繋がりをもっている者がいることも事実である。

また、南相馬市には野馬追という大きな祭事がある。年一回の市を挙げての祭事には、全国から多くの人が集まり、農家民宿を含めて宿泊施設は予約がいっぱいになるという。

私たちはこのプロジェクトへの参加が決定するまでその存在を知らなかった。“震災と野馬追”入り口はどちらからでも構わないが、上手く発信していくことは、南相馬市の今後の復興においても大きな影響を及ぼすと考えられる。

現在南相馬市を含む、全国の多くの市町村で少子高齢化による働き手不足が問題となっている。「若い人たちがその土地を訪れ、実際に魅力に触れる。そして、その情報が広がっていく。」長い目でみた話であるが、そうやって続いていくのではないだろうか。

【企業の持つ潜在的能力による“南相馬市で人材を確保できる”可能性】

2014年頃に企業研修を目的に南相馬市を訪問してくれた会社が複数あったことを記憶している。

- ④ 印刷会社社員数名
- ⑤ 鉄道会社社員数名
- ⑥ 電気メーカー社員数名財閥系社員数名

企業研修で使用する宿泊施設は通常ビジネスホテルとイメージがあったため、日本を代表する大企業が農家民宿を研修における宿泊施設として利用していることは驚きを感じた。話によると有名企業の一人が農家民宿に宿泊し、その口コミが社内に広がり、最終的に関係のある会社に派生したとのことだった。ビジネスホテルの方が快適で、綺麗なイメージがあることは事実である。しかし、民宿に宿泊することで、ビジネスホテルでは感じられない人の温かみというおもてなしを感じることができる。お話の中でも、「民宿は非効率であるが、そこでしか体感できないものが存在する」と伺った。企業という効率を意識しがちな組織においても大切なものが学べる機会となるのかもしれない。そして、このつながりが発展することで、南相馬市に支店や工場を置くことに繋がるかもしれない。それによって、雇用が生まれ、若い働き手といった人材の流出を防ぐことができる。過ごしやすい気候やかつて優秀な二次産業が発達していた点、農業、漁業といった一次産業を行いやすい環境に恵まれているといった南相馬の魅力を広く理解してもらうことが重要であり、農家民宿は重要な役割を担っていると考ええる。

【日本に在住する外国人の方々とのつながり】

- ⑧ 日本在住のサイクリングクラブの方々

メディア関係を除くと、外国人宿泊者は日本在住のサイクリングクラブの方々しかいなかった。外国人観光客においては、日本語しか対応できなく、アクセスも良くない農家民宿に泊まるのは、抵抗を感じるのかもしれない。ただ、日本人である自分たちも今回の宿泊を通して、南相馬の方々の温かさや生活を深く感じる事ができた。外国人の観光客にとっても貴重な経験となると考える。

また、震災を通して外国からも多くの支援を受けてきたはずである、海外の方たちに震災を正しく理解してもらうことは、国と国との関係を強めることにもつながるのではないかと考える。